

いずみさの教育

NOW

問合先
学校教育課

外国にルーツがある児童生徒に寄り添うために

8月8日、文部科学省は「日本語指導が必要な児童生徒（*）の受け入れ状況等に関する調査（令和5年度）」についての結果を公表しました。その調査によると、昨年度の公立学校における日本語指導が必要な児童生徒は69,143人であり、前年度に比べ11,405人増加しています。日本語指導が必要な児童生徒は年々増加し、今後より一層の増加が見込まれています。本市でも同様の傾向にあり、「令和6年度日本語指導が必要な児童生徒数」は65人（5月1日現在）。昨年度の同時期における55人より増加しています。

日本語指導が必要な児童生徒は不安を抱えていることが少なくありません。「文化の違い」「学習」「言語の違いによる教職員やまわりの児童生徒とのコミュニケーション」など、不安の要因は多岐にわたります。その不安に寄り添うため、本市ではこれまで、日本語指導を含むきめ細やかな支援の充実や、子どもたちが多様な文化に触れ、それぞれの違いを豊かさにとらえ、認め合う「多文化共生」の考え方に基づく実践をすすめてきました。しかし、現在の状況を踏まえると、「世界に羽ばたく国際都市」を標榜する本市としては、今後より一層の取組の充実が必要であると考えます。令和5年度、文部科学省からは「外国人受け入れ拡大に対応した日本語教育・外国人児童生徒等への教育の充実」が発出されました。また、令和6年度には、本市において佐野中学校夜間学級が開設されました。これらを追い風とし、日本語指導が必要な児童生徒を含む、すべての子どもたちが安心して学ぶことができる学校、誰一人とり残さない学校づくりをすすめていきます。ご理解ご協力をよろしく願います。

学校園紹介

体験を通して学ぶみんなの学校 ～大木小学校～



大木小学校は、豊かな自然に囲まれた素晴らしい環境にあります。この環境を生かし、体験を通して学ぶ機会がたくさんあります。

4月は、学校の近くにある土手に行き、「わらびとり」をします。ここでとったわらびを使って、高学年のみなさんがわらびご飯のおむすびを配ってくれます。

5月には、学校の横を流れる「大木川」へ行き、川に住む様々な生き物について学ぶ「川たんけん」を行っています。



6月には、「大木たんけん」として大木地区のお寺や神社、つり橋など魅力的な場所へ行き、探究学習を行います。今年はゴミ拾いも行い、美しい大木の里を守る活動もしました。



このほかにも、「ホタル見会」や「盆おどり」への参加や「もちつき」など、地域のみなさんの力を借りながらいろいろな体験をしています。さらに今年は、学校創立150周年ということで、まちづくり協議会のみなさんの力を借りて「大木たんけん」のスペシャル版ともいえる「国際フィールドスクール」を9月に行いました。

実際に体験することを通して、学ぶことのおもしろさを感じ、自分への自信を深める大木小学校の児童です。

つながりを大切に ～日根野中学校～

日根野中学校では、「集団づくり」を教育活動の中心に位置づけ、行事なども活用しながら、さまざまなとりくみを進めています。その一つに連合スポーツ大会があります。



本校の体育大会では、伝統的に縦割りで連合を結成し、各連合対抗で優勝をめざし競技を進めています。このことから、2年前より「連合スポーツ大会」と改称して開催しています。

7月、終業式の前日に各連合の結団式を行いました。3年生が進行を務めながら、連合委員長や副委員長、応援団長らから連合スポーツ大会に向けた意気込みが伝えられました。

夏休み中には、3年生の応援団のメンバーが応援合戦の内容について話し合い、練習を行っていました。2学期に入り、1・2年生を含めた連合のメンバーに動きや掛け声の言葉を伝えるなど、それぞれの連合で中心となり練習に励んでいました。



うまくいかないこともあったと思いますが、その都度話し合い、連合が一体となり優勝をめざしたことで、学年の中だけでなく、異学年とのつながりも育まれたことと思います。これからも、そのつながりがより強いものとなり、自らが高めあい、成長できる集団となるようにとりくみを進めていきます。